

洗礼者ヨハネから洗礼を受けられた主イエスは、30年過ごされたナザレを去られ、カファルナウムというガリラヤ湖畔の町へ行って住まわれました。以後主イエスはここを拠点に宣教活動が続けられることとなります。旧約聖書に記されている多くの預言者たちは首都エルサレムで活躍しており、エルサレムから170kmほど離れたガリラヤで活躍した預言者はいません。学者たちも人々も、ガリラヤから著名な人は出ることはないと考えておりました。しかし主なる神はそのような人間的常識に対して自由であられ、自由な御心を持っておられます。そしてその御心は旧約聖書にも記されていることだったのだと、聖書は語っております。主イエスは聖書の中でそれまでの風習や習慣に鋭く挑戦なさいましたが、これは主イエスが個人でなさったことではなく、ただ主なる神の御心に従ったことだったのがよくわかります。

さて、主イエスが最初になさったのは弟子を召されることでした。私たちの常識では、まず弟子になる人が先生の門をたたきますが、イスラエルでは先生が自分の心にかなう人を、召されることになっておりました。本日の福音書には最初に人の漁師が召されたことが記されておりました。もし、私たちが主イエスの立場だったらどんな人を選ぶでしょうか。博学な人でしょうか、行動力のある人でしょうか、少なくとも、漁師を選ぶ人はいないでしょう。漁師は当時知識も教養もなく、貧しい人々でした。仕事も危険が多いものでした。そういう人々を主イエスはお召しになりました。ここに私たちは主なる神の偉大なご計画を感じるようになります。この人々が選ばれたのはまことに主の御心にかなったことであり、主イエスの宣教を立派に受け継いでいく人々であったことを人間が知ったのは、何十年も後のことでした。ペテロは主イエスが天に帰られた後、教会の代表となって働きました。主イエスの弟子のなかで最長老だったペテロは、主イエスに一番重んじられた人となりました。弟のアンデレはペテロに勝る信仰を持っておりました。殉教するまで教会のためによく働き、兄ペテロをよく助けました。もうひとつの兄弟、ゼベダイの子ヤコブとヨハネも同様です。ヤコブもペテロとともに主イエスに特に重んじられた弟子の一人です。ヤコブは弟子のなかで最初に殉教することになりますが、真っ先に命をもって福音を告げ知らせる人となっていったのです。弟のヨハネは、弟子のなかで唯一殉教せずに天寿を全うした人です。90歳前後まで生きたと言われているヨハネは、晩年ヨハネによる福音書を記し、後世に福音を告げ知らせる大切な役割を果たしました。

このように主なる神の御心は私たち人間の心を超えて働き、主イエスを通して示されていたのです。

彼らは漁師でしたが、彼らにとって網は命の次に大事なものです。これがなくては生活をする事が出来ません。この4人のなかで、少なくともペテロは既に結婚し、家庭を持っておりました。ペテロの家には妻のしゅうとめも一緒にいたようです。このような人が網を捨ててすぐに主イエスに従ったというのはそんなに簡単なことではありません。ヤコブとヨハネも網と父ゼベダイを捨てて主イエスに従ったということです。日本以上に血筋を重んじ、家を継ぐことが大変重要なことと考えられているユダヤの国で、これがどれだけ困難なことが、私たちにも想像できます。

これは、主イエスに従うには覚悟がいるということよりも、もっと大切なことが記されています。主イエスの弟子になった4人は、なにかよい待遇が示されたのでもなく、何かもらえるのでもありませんでした。弟子になる代わりに与えられるものはなにもなかったのです。そして彼らを待っていたのは、貧しい暮らしと迫害と、多くの困難でした。そのような生活へ網を捨て、父も捨てて従ったのは、そこにこの世のものではない、本当の喜びがあると知ったからでした。この世の喜びはいつか忘れられ、潤った咽もいつかは乾くけれども、主イエスとの生活には喜びの終りがなく、天国に通じる道があると知ったからでした。主イエスはこのようにして弟子をお召しになったのです。

さて、このことは主イエスの弟子だけでなく、私たちも同様です。私たちを召された主イエスは私たちを招かれるときに、この世のいつかは終わる喜びではなく、いつまでも変わらない本当の喜びと天国の道をしっかりとふみしめるように望んでおられたのです。私たちは主のみ心に従う喜びを感じているでしょうか。それよりもこの世的な喜びの方に魅力を感じてはいないでしょうか。この世的な喜びを捨て、主イエスに従った弟子の心をよく黙想してみたいものです。